

第二章 立野正一

第一次世界大戦後の京都

井伊直弼（一八一五〜一八六〇）が攘夷派の反対を押し切って不平等条約を受け入れて以来、日本は欧米の人種的偏見に神経を尖らせてきた。一九二四年七月、アメリカは移民法を改正し、日本人の新規移民・帰化の道を閉ざした。日本はこれを排日移民法と呼んで激しく非難した。実のところ、それまでアメリカ連邦政府は、アジア系民族の中で唯一日本人の移民・帰化を認めており、歴代大統領も概して日本の体面維持に協力的であった。しかし伝統的な白人至上主義に加え、日系移民の増長に危機感を抱いたイタリヤ系移民の圧力も加わり、移民法の改正に至る。その時の日本人の怒りは、自分達が他のアジア民族と同列に置かれたことに対する怒りでもあった。

日本人は欧米人からの差別に対して常に過敏であり、自身が他のアジア民族を差別する時は甚だ鈍感であった。アジア民族——朝鮮人、中国人、アイヌ、沖縄人など——だけでは足りない。江戸時代以来の被差別部落民の待遇もほとんど改善されないまま放置されていた。

フランスア喫茶室の創業者・立野正一（一九〇八〜一九九五）は、被差別部落解放運動や労働運動が活発化する一九二〇年台に青年期を迎えた。立野の生い立ちを紹介する前に、第一次世界大戦後の京都の解放運動・労働運動の様子を見ておきたい。

一九二二年三月三日、被差別部落の代表者達が京都・岡崎公会堂に集まり、初めて部落民自身の手による結社を宣言した。

犠牲者がその烙印を投げ返す時が来たのだ。殉教者が、その荊冠を祝福される時が来たのだ。

吾々がエタである事を誇り得る時が来たのだ。

吾々は、かならず卑屈なる言葉と怯懦きょうだなる行為によって、祖先を辱しめ、人間を冒瀆してはならぬ。そうして人の世の冷たさが、何んなに冷たいか、人間をいいたわめる事が何であるかをよく知っている吾々は、心から人生の熱と光を願も礼賛するものである。

水平社は、かくして生れた。

人の世に熱あれ、人間に光りあれ。

この日に創立された全国水平社は、その宣言文に現れる「烙印」「殉教者」「荊冠」などの言葉から分かるように、キリスト教の影響を強

く受けていた。一方で、この宣言は「全国に散在する吾が特殊部落民よ團結せよ」という、共産党宣言を思わせるような呼びかけで始まっていた。日本が反米感情を煮えたぎらせている時、その日本社会の内部からも異議が唱えられ始めたのだった。

一九一八年七月から十月にかけて、米価引き下げを求める米騒動が全国に広がった。八月十日、京都・下京一帯でも生活に苦しむ被差別部落住民が米屋を襲撃する。以後十月中旬まで、京都府内では衣食関連商店の襲撃、価格交渉、困窮者救済金寄付の要求などが続いた。騒動期間を通じて全国にストライキや暴動が発生し、民衆の権利意識、労働団体の活動様態に大きな転機をもたらした。¹

一連の騒動では、被差別部落出身者が大きな役割を果たした。翌十九年三月の第四十議会で、部落改善請願書が採択され、政府は部落環境の改善と、被差別民の融和への取り組みを始める。しかし間もなく、被差別部落の進歩的な青年達は、政府の融和政策がかえって部落民の自立を妨げると感じ始めていた。一九二一年七月、佐野学（一八九二〜一九五三）が「特殊部落民解放論」を発表し、労働者階級との結合と、社会革命を唱えた。これをきっかけに前衛的な全国組織を結成する機運が強まり、一九二二年三月三日の全国水平社創立につながる。^{2 3}

米騒動や水平社結成と並行して、労働運動も活発化した。一九一九年四月、当時最先端の設備を誇った京都・岡崎の奥村電気商会で、夜学通学を願い出た若い旋盤工二名が、上司に殴打された。充実し

た生産設備とは裏腹に、奥村電気の労働管理は甚だ前近代的で、上層職員による職工の殴打は日常茶飯事であった。同情した約二百名の旋盤工は怠業で会社に抗議する。会社側は、旋盤工と上司の双方を解雇し、争議は一旦収束する。

その後、第一次大戦後の景気減退と物価高で奥村電気の職工達の生活が苦しくなっていた。七月、会社側は実質的な賃金引下げを発表すると、職工達は再び罷業で対抗する。今度は全職工の約三分の二が参加する本格的なストライキであった。このストライキは、友愛会京都連合会により指揮されていた。友愛会は一九一二年キリスト教者鈴木文治（一八八五〜一九四六）らにより結成された労働団体であり、奥村電気は京都連合会の最大の拠点であった。この争議を現場で指揮したのは奥村甚之助（一八七四〜一九三〇）らである。

奥村甚之助は一八七四年京都市下京区に生まれ、一四歳の時から職工として働きはじめた。日雇労働、兵役、東京・日本電気への就職、工手学校での研修、逓信省を経て、一九一五年に奥村電気に就職する。一七年には奥電の一五二名の労働者を集めて、友愛会の奥電支部を結成していた。⁴

八月中旬、会社側は賃下げを撤回し、ストライキは成功する。後年の激しい弾圧を思えば信じ難いことだが、この時の京都府警は奥電争議にほとんど介入しなかった。これは府警も奥電の悪辣な労務管理を問題視していたこと、当時の藤沼府警察部長が鈴木文治会長と東大同期生であったこと、藤沼部長自身も労働問題に深い理解を

持ち、友愛会京都府連合会の高山義三会長と懇意であったなどが理由として挙げられる。⁵

一九二〇年、友愛会は大日本労働総同盟友愛会と改称、二一年に日本労働総同盟と改め、社会主義色を鮮明にする。友愛会京都府連合会は総同盟京都連合会と改称した。

成功したかに見えた奥電のストライキであったが、その後会社側は友愛会争議団の切り崩しにかかり、一九二〇年三月、争議団を率いた京都府連合会鴨東支部長・奥村甚之助を解雇する。

一九二〇年十一月、高山義三の兵役除隊歓迎集会で警察と衝突し（京都赤旗事件）、騒ぎに連座した奥村は懲役四カ月に処せられる。

翌二一年、出獄した奥村は日新電機に再就職し、翌二二年六月三日、京都電気工組合を結成した。電気工組は組合員約五十名で発足し、総同盟京都連合会を支えた。一九二二年五月一日、総同盟はメンバーにあわせ、京都で演説会を開催している。⁶

一九一九年の奥電争議の後、京都・東山の陶磁器工場で争議が起こり、友愛会から活動家が応援に駆けつけた。清水焼に代表される東山の陶磁器工業は、原料・顔料製造などで近代化は進みつつあったが、工場の大半は旧態依然とした零細経営であった。その後しばらく目立った争議は起きていないが、不況にともなう価格下落と賃下げの動きを受けて、一九二二年三月頃から、陶磁器工たちの間で組合結成の機運が生まれる。

しかし皆組合運動の未経験者であったので勝手がわからず、

警察ならしっているだろうと「くぼた」刑事に相談し、いろいろと組合について教えてもらったという。

（中略）川口鉦一・谷口善太郎らの若手が下働きして二十日間ほどは仕事を休んで奔走し、しばしば馬町辺の葬礼茶屋で準備会を重ねた。しかしただ会合するといっても集まりが悪いので、藤八拳をやったり酒をだしたり、首脳者たちは苦心を重ねたのである。

一九二二年六月一日、陶磁器工組合創立大会が岡崎公会堂で開催された。大会には奥村甚之助が来賓として呼ばれた。

さて創立大会当日は主だった職人たちは紋付に白足袋の盛装に威儀を正し、壇上には金屏風をめぐらすという大時代的陣立てのもとに、組合員はそれぞれ三条・五条・日吉・泉涌寺の地域毎に席についた。

ところが宣言・決議文、役員候補選定などの基本的準備がまったくできておらず、ともに進行しない議事に参加者から非難が沸き起こった。来賓席の奥村甚之助は、座長の許可を得て登壇し、「従業員各自発的に成りしその席上に拘らず、この不統一・無秩序は何たる醜態ぞ」と一喝した。ようやく代議員達が大会宣言、決議文、役員候補をまとめたので騒ぎは収まり、満場拍手で採択、大会は無事終了した。

発足した陶器工組合は早速賃下げ撤回に取り組み、かなりの成果を上げたと言われる。組合活動は、川口鉦一、谷口善太郎（一八八九～一九七四）⁷、金井健吉（一九〇五～）⁸、加藤護一、早川忠孝らの青年達によって担われ、約六百名の組合員を率いた。争議のない時でも、地方出身者への職場斡旋で多忙を極めたという。⁹

谷口や早川は、京都電気工組合メンバーとともに総同盟京都連合会の活動を支え、左派活動家としての性格を鮮明にしていた。

一九一九年の争議から四年が経ち、奥村電気商会で再び争議が起こる。奥村電気は不況にともない経営が悪化していた。事業縮小、人員整理、減給を検討する。奥村甚之助が指導する京都電気工組合も、会社の窮状を勘案してしばらくは争議を控えていたが、解雇と賃下げが現実のものとなりつつあり、一九二三年七月十二日、遂にストライキを執行する。この争議は約一ヶ月間にわたり継続し、大規模デモ・演説会の組織、会社側の切り崩しへの抵抗、支援団体からの多額のカンパ、スト中の生計維持のための行商隊結成など、次々に洗練された戦術を編み出し、規模的にも京都空前の大争議となった。最終的に争議団は会社側から大幅な譲歩を勝ち取り、組合指導者としての奥村甚之助の声望は一挙に高まる。しかし争議期間中、要求内容をめぐって組合内で対立が発生した。争議終結後に和解するものの、この時の従業員間の確執が勤務中の士気を低下させ、奥村電気の経営をさらに悪化させることになる。¹⁰

陶磁器工組合も、結成以後争議を活発化させた。一九二四年七月

二十日には、二割の賃下げに反対して、はじめて本格的なストライキを執行する。スト期間中は炊き出し、カンパを行う一方、スト破りの職工は殴り倒して土下座させるなど、いささか手荒な闘争を展開した。約二週間におよぶ争議の末、右翼団体国粋会の支援を得て調停が成立する。八月二日、新日吉神社で工場経営者と職工が手打ち式に集まり、和解の杯を交わした後、酒宴に移った。¹¹

後にフランクソア喫茶室を創業する立野正一は、間もなく電気工組合の奥村甚之助、陶磁器工組合の早川忠孝、金井健吉などと、労働運動の現場で出会うことになる。

立野正一

立野正一は一九〇八年九月七日、山口県伊佐町（現・山口県美祢市伊佐町）に生まれた。

正一の父・立野吉之助は和紙の原料である楮こうぞの卸を営んでいた。

母・久ひさは村山龍平りょうへい（一八五〇～一九三三、朝日新聞創業者）宅へ行儀見習いに出たことがある。正一は一九〇八年に五人兄弟姉妹の次男として生まれる。兄、姉、二人の妹がいたが、長兄と三女は幼く

して亡くなっている。

吉之助のおじはあざ上正蔵という長州藩士で、吉田松陰の門下生であった。一八六四(元治元年)年八月二〇日に起きた禁門の変(蛤御門の変)において、あざ上は二一歳で戦死している。また一八六八年(慶応四年)一月二七日、戊辰戦争における鳥羽・伏見の戦いで、やはり長州藩士であった立野家の親縁・岡崎高槌が戦死している。

こうした戦闘的武人を輩出した立野家であったが、吉之助はむしろ商人としての才能を発揮した。楮卸業の経営は順調に推移し、立野家の家計を潤す。吉之助は赤間関市(現在の下関)に設けた出張所を運営する傍ら、料亭「春帆楼」にたびたび通った。

かつて春帆楼の敷地には、壇ノ浦の合戦の後に入水した安徳天皇を祀る「安徳天皇阿弥陀寺」があった。阿弥陀寺は一八六八年(慶応四年)の排仏棄釈によって廃寺となる。その「方丈の跡」を近く的眼科医・藤野玄洋が買い取り、一八七八年新たに月波楼医院を開業した。その後、妻のミチは医院を改造して割烹を兼ねた旅館を開業し、三棟の建物の一つに春帆楼と名づけた。

春帆楼は長州随一の料亭に成長し、有力政治家、商工業者が出入りした。これらの客の接待のため、一流の料理人や芸妓が集められた。吉之助は、京都の先斗町から出張してきた芸妓を臙膺にする。

一八九五年四月十七日には、伊藤博文(一八四一〜一九〇九)の意向により、春帆楼が日清戦争講和会議の会場として使用されている。同年に文部大臣に就任した西園寺公望(一八四九〜一九四〇)は、清から得た賠償金の一部を、京都帝国大学創設費用に充てることを検討した。ただし結果的に賠償金は教育基金に組み入れられ、学校教育に振り向けられている。¹²

立野家の家業は、吉之助が米相場で失敗したことにより暗転する。借金返済のため、楮卸の店はすべて手放すことになった。吉之助は山口を離れ、それまで面倒を見てきた京都先斗町の芸妓のもとに身を寄せた。この芸妓は先斗町でもかなり名が売れていた。画家・橋本関雪(一八八三〜一九四五)も臙膺の客の一人であり、彼女から義大夫を習っていたという。一方、正一は残された家族は母方の実家に身を寄せた。経済的にはさほど苦しくはなかったが、正一は伯父・伯母からの差別に遭い、辛い時期を送ることになる

彼女に支えられながら、吉之助は京都で新たに呉服の行商をはじめた。関西では「かつぎ屋」と呼ばれ、衣装を収めた箱を背負って全国を渡り歩く商売である。吉之助は、かつての楮取引の人脈を頼って、山口や北九州に得意先を広げ、再び安定した収入を得るようになった。暮らしを立て直した吉之助は、一九一五年、正一を京都に呼び寄せる。この時、七歳の正一は一人で汽車に乗り、京都へ向かった。それからしばらくの後、久と長女も京都に移住した。長女

は京都女子高等専門学校（現・京都女子大学）へ通い、卒業後、小倉の資産家と結婚する。この小倉の家は、吉之助の商売の得意先となった。一方、次女は芸妓と暮らす吉之助を嫌悪し、同居を拒んだ。

一九二〇年、尋常小学校を卒業した立野正一は、京都市立美術工芸学校（現・京都市立銅駝美術工芸高等学校）に入学する。一八八一年に創立されたこの美術学校は「美工」と呼ばれ、既に日本画家

の西山翠嶂（本名・卯三郎、一九七九〜一九五八）¹³、入江波光（本

名・幾治郎、一八八七〜一九四八）¹⁴、土田麦僊（本名・金二、一

八八七〜一九三六）¹⁵、榊原紫峰（本名・安造、一八八七〜一九

七）¹⁶、村上華岳（本名・震一、一八八八〜一九三九）¹⁷、小野

竹喬（本名・英吉、一八八九〜一九七九）¹⁸、野長瀬晩花（本名・

弘男、一八八九〜一九六四）¹⁹、甲斐庄楠音（二八九四〜一九七八）、

堂本印象（本名・三之助、一八九一〜一九七五、物故日本画家

pp261-262）などの著名な画家を輩出していた。正一が入学した時点

においても、伊藤仁三郎（一九〇五〜二〇〇二）²⁰、新見虚舟（本

名・孝、一九〇四〜一九九五）²¹、澤田石民（本名・実、一九〇五

〜一九四四）²²、林司馬（一九〇六〜一九八五）²³、要樹平（本

名・栄蔵、一九〇六〜一九九四）²⁴、磯田又一郎（一九〇七〜一九八八）²⁵など、後の京都画壇を代表する人物が在籍している。

当時の美工は、京都帝国大学や第三高等学校（三高）に近い上京区吉田（現・左京区上阿達町）にあった。同じ敷地内に、美工の上級校である京都市立絵画専門学校（絵専、現・京都市立芸術大学）も併設されていた。

一九二二年、三高で金子校長排斥騒動が起こる。同年三月、三高生に人気のあった教員七名に対して、金子銓太郎校長は、人事刷新を理由に辞職を勧告する。これに反対した三高生達は、辞職勧告撤回と校長不信任を決議し、授業ポイコットを実施する。五月上旬、京都帝大教員の調停により、金子は辞職勧告を撤回し、騒動は三高生側の勝利に終わった。²⁶

その二年後、金子騒動に似た事件が、絵専と美工でも発生する。

一九二四年に入り、絵専・美工は、上京区今熊野（現・東山区）の市衛生試験所跡地へ移転することが決まった。これにあわせて同年三月、藤代禎輔校長は、職員幹部会内規の制定を提案する。これは有力教員の影響力を排除し、高等官教員による学校運営を狙ったも

のであった。

四十年来親しんできた吉田校地からの移転に加え、高名な教員の裁量を抑えつけようとする校長の提案に、教員は猛反発した。三月二五日、美工・絵専卒業式の当日、職員幹部会は多数決で校長提案を廃案にするが、校長は同意を拒否した。四月一日から五月十日かけ、絵専教授・竹内栖鳳（本名・恒吉、一九六四〜一九四二）²⁷、中井宗太郎（一八七九〜一九六六）、西山翠嶂、荒木矩、菊池契月（本名・莞爾一八七九〜一九五五）²⁸、助教教授・入江波光、講師・伊藤猷典、美工教諭の都路華香（本名・宇佐雄、一九〇三〜一九六五）²⁹、西村源次郎らが校長の専横に抗議して辞職を表明する。この連袂辞職表明は、美工・絵専の生徒達に衝撃を与えた。五月十日、絵専の生徒達は生徒大会を開き、校長辞職と教員留任要請を決議の上、嘆願書を校長と京都市長に提出した。大会後、生徒達は、二年前の三高生と同様、授業ボイコット戦術に突入する。美工生徒もボイコットに同調した。恐らくこの時、絵専に進学していた澤田石民、伊藤仁三郎、新見虚舟らも積極的に動いていたと思われる。五月二十九日、京都市助役・多久安信が騒動の調停に乗り出す。その結果、藤代校長、竹内栖鳳、山元春舉（本名・金右衛門一八七二〜一九三三）および荒木矩教授が喧嘩両成敗の形で退任し、校地移転は予定通り進めることで決着した。同日、授業ボイコットは解かれ、多久が校長代理となり、授業を再開した。³⁰

当時の在校生が、この「絵専騒動」の様子を次のように語ってい

る。（括弧内は当時の在校者氏名）³¹

大正13年4月、学校移転に関して藤代禎輔校長と竹内栖鳳先生、山元春舉先生の意見不和の為校内治らず在校生の本科3年生を中心に各学年、予科より委員選出、吉田山に集合協議。京都市長に書類を手渡す。結果は校長と栖鳳、春舉両先生に身を引いてもらい、福田平八郎先生に学校に来て頂く様になった。学校は今熊野に移転と決定。校長事務取扱、多久安信。（森）

大正13年4月、当時の藤代禎輔校長により、一部教師の独裁を改め、高等官教員による学校運営が提案されたが、有力教師により否決され、逆に校長の退陣を要求した。学校は混乱の極に達し、学生、生徒も黙しておれず、絵専校生が中心となり、美工生にもおおよぶ全校のストライキとなり、全校生のリーダーが吉田山に集り校長辞職、有力実技教師の復校が実現するまでストライキに同調せよと呼びかけた。（金川）

大正13年に学校に紛擾があり各新聞が大きく絵専騒動として報道した。一生徒である私には、その真相はわからなかったが、藤代禎輔校長と有力教授との間に確執があり実習諸先生が連袂辞職されたと伝えられた。上級生の一部は諸先生を訪ねて真意をつかもうとし、又留任を嘆願したりしたようだったが結局藤代校長、荒木矩、竹内栖鳳、山元春舉の諸先生は辞職され

た。(勝田哲)

美術界に目を移すと、一九〇七年に国の主導で始まった文部省展覧会(文展)は、不透明な審査員の選定のために美術界の不満を高めていた。一九一四年、横山大観(たいかん)(本名・秀松、一九六八〜一九五八)³²が審査員を外されたことをきっかけに、文展批判はさらに強まり、美工同人の入江、土田、榊原、村上、小野、野長瀬らは一九一八年、「国画創作協会」、通称「国画会」を設立する。西洋美術と東洋美術を融合させ、新たな日本画の創作を目指す国画会は、その創立にあたり、次のように宣言した。

「各自ハ各自ノ自由ノ創造ヲ生命トス」

「芸術ノ創作ハ極メテ自由ナラザル可カラズ」

「本会ハ創作ノ自由ヲ尊重スルヲ以テ第一義トナス」³³

一九二一年から二二年にかけて、土田、小野、野長瀬は黒田重太郎(一八八七〜一九七〇)とともに日本郵船賀茂丸に乗ってヨーロッパを訪れる。そしてフランス、イタリア、スペインなど各地の美術館、建築物を精力的に巡り、西洋美術の真髄をじかに学び取った。

³⁴

高度な画法に通じながら革新的な姿勢で創作に臨む国画会の活動は、京都の画学生達から強く支持され、澤田、伊藤、要、林、新見は土田麦僊の門下に入る。澤田らは土田の死後も、その遺志を継い

で一九三八年に柏舟社(はくしゅうしゃ)を結成し、果敢な創作活動を続けた。

藤代校長問題のみならず、絵画運動においても活躍する上級生達、その中でも特に澤田の活躍は、立野正一を心酔させた。立野は澤田らとの交流の中で、絵画ではジャン・フランソワ・ミレー(一八一四〜一八七五)をはじめとするバルビゾン派の絵画、文学では志賀直哉(一八八三〜一九七二)、武者小路実篤(一八八五〜一九七六)など、自然主義の芸術家に強い憧れを抱くようになる。また武者小路が文芸誌「白樺」において紹介したフィンセント・ファン・ゴッホ(一八五三〜一八九〇)の絵画にも感銘を受ける。

立野が京都で生活を始めた頃、京都帝国大学経済学部教授の河上肇(はじめ)が大阪朝日新聞に「貧乏物語」を連載し、反響を呼んでいた。その後、河上はマルクス主義に傾斜し、彼の講義は京大生、三高生達を熱狂させた。

一九二六年労働農民党(労農党)が設立される。四年前の一九二二年、日本共産党が非合法のうちに結成されていたが、労農党は実質的に共産党の合法組織であった。京都では労農党京都府連合会委員長(せんじ)の山本宣治(一八八九〜一九二九)、通称「山宣」が、産児制限、

労働者教育、被差別部落解放、治安維持法反対を掲げて活発に活動していた。山宣の大衆的人気は強く、美工の画学生達からも深く愛された。一九二八年普通選挙では、河上肇の応援を受けながら衆議

院に当選し、香川県選出の大山郁夫（一八八〇～一九五五）³⁵とともに、議会に労農党の地歩を築いた。

労働運動が活発化する一方で、一九二五年五月に治安維持法が施行し、直後に朝鮮共産党員の検挙、同年十一月に京大・同志社大の社会科学研究会会員の検挙（京都学連事件）が行われる。その後も労農党関係者への締め付けは強まり、また、労農党の内部対立も顕在化した。一九二六年十二月、党を脱退した右派が新社会民衆党、中間派が日本労農党を結成し、三党に分裂する。

この分裂は労働組合にも波及する。一九二六年十二月、日本労働同盟は、中間派の日本労働組合同盟、左派の日本労働組合評議会に分裂し、総同盟には右派のみ残る形となった。奥村甚之助や谷口善太郎らが率いていた総同盟京都連合会はメンバーのほとんどが左派であったため、そのまま労働組合評議会・京都地方評議会として再出発した。労働組合評議会は一九二八年四月に解散を命じられ、日本労働組合全国協議会（全協）が非合法組織として結成される。陶磁器工組合の川口鉦一、金井健吉、加藤護一らは全協メンバーとして活動を続けた。

一九二八年二月の普通選挙の一カ月後には共産党・労農党関係者への大弾圧が行われ、労農党も非合法となる（三・一五事件）。この弾圧では、労農党評議員となっていた谷口善太郎、同党無産青年同盟で友仙工の白田銀一が送検され、激しい拷問の末に共産党員であることを自白させられた。京大の社研会員二十二名も検束され、そ

の責任を取る形で河上は京大を辞職する

一九二九年三月、田中政友会内閣は三・一五事件を理由に、それまで最高十年であった治安維持法の刑罰を死刑・無期に引き上げる改正案を上程した。三月五日、改正案は二九四対一七〇の賛成多数で可決される。議決前、反対討論を試みた山本宣治は、政友会の討議打切動議に妨害される。その夜、山本は神田の宿舍で、右翼団体の黒田保久ほくじ二（一八九三～一九五二年頃）によって暗殺される。

翌日、国会は山宣暗殺を防げなかった政府の責任をめぐって紛糾した。新聞各紙は山本の死を大々的に報じ、東京に号外が飛び交った。³⁶

友仙争議

立野正一は一九二五年に一七歳で美工を卒業した後、父・吉之助の紹介で橋本関雪の内弟子になる。しかし、画業がはかばかしくなかったためか、橋本宅は数ヶ月で辞去している。以後、陶磁器の絵付工などをしながら、絵の修行を続けるが、次第に画業に行き詰まりを感じていく。京都陶器工組合の例で触れたように、陶磁器産業は零細経営の集積であった。組合の力もまだ限られており、職工達

は旧態依然とした労働環境に置かれていた。絵付工として働く立野は、工場主の理不尽な職工支配に憤りを募らせていった。

この時期の立野は、幾つかの工場を渡り歩き、愛知県・知多半島まで赴いて、常滑焼の制作に携わることもあった。立野が働いた喜多という人物が経営する工場は、比較的良好な条件で職工を扱っていたようである。

いま一度、美術の真髄に触れようと、立野は東京を訪れて美術館・博物館を巡った。山宣が暗殺されたのはちょうどこの時であった。立野が号外を手にしたのは、上野の国立美術館近くだった。山宣の死は立野にも大きな衝撃を与えた。「なぜ働く者のために闘ってきた彼が、殺されなければならないのか？」立野は自問を続けた。

三月一五日、京都で山宣の労働者農民葬が実施された。この葬儀日程は、前年の三・一五事件への抗議の意味を込めていた。労働関係者はこれを機に運動の再興を試みるが、翌四月一六日の弾圧により再び打撃を受ける（四・一六事件）。³⁷

山宣を失い、党と組合の組織も著しく弱体化する中で、河上肇の身辺も懸念された。京大の学生組織は、右翼テロ警護のため、学生二名を交代で河上宅に派遣する。

京都に帰った立野正一は、悩んだ末、七条大橋付近に住む陶磁器工組合員・早川忠孝を訪ねる。この時、早川は京都地方評議会傘下の京都合同労働組合・南部地区常任も務めており、四・一六事件以後の労働運動停滞の中で、目立った活動を続ける数少ない活動家であった。³⁸ 早川の声望は、労働者の間で絶大であり、同じ陶磁器工

である立野も、強い信頼を寄せたのだった。

立野は早川に、画業を断念し社会主義活動に身を投じる決意を伝える。早川の家は大変貧相だったが、家の中では数名の青年が必死で新聞やビラを印刷していた。早川を頼って指導を受ける青年は多くおり、立野も当分の間、彼らに交じって労働運動の指導を受けることになった。³⁹

その年の夏、早川宅を労働党活動家・大塚有章（一八九七〜一九七九）が訪ねる。大塚はじめ新労働党のメンバーは、早川の活躍に一目置きなながらも、やや軽薄で地に足のつかない印象を拭えずにいた。大塚はこの際、十分に意見交換をしようと早川宅を訪ねたのである。

大塚は山口県岩国の大地主の家に生まれ、岩国中学、早稲田大学政治経済学部を卒業し、南満州鉄道株式会社（満鉄）に入社した。しかし間もなく肺結核のため離職し、郷里で静養する。大塚の姉は河上肇と結婚しており、大塚にとって河上は義兄であった。その河上の紹介で、大塚は大阪・北浜の藤本ビル・ブローカー銀行に就職する。次第に社会問題に関心を持つようになった大塚は、二八年の普通選挙で香川県から出馬した大山郁夫（一八八〇〜一九五五）を支援し、警察の暴行を受ける。大塚はこれにめげず、ますます社会問題にのめりこんでいった。一九二九年三月四日、大塚は河上とともに大阪・天王寺公会堂において、一時関西に戻っていた山宣の演説を聴いている。その翌日山宣暗殺を知った大塚は、本格的な活動を始める。⁴⁰ 四・一六事件を経た八月八日、大塚は河上肇、大山郁

夫、奥村甚之助、早川忠孝らとともに、旧労農党左派を集めて新労農党の結成に参画し、同党の京都府連合会書記長に就任する。結党・就任とは言っても、公の場で華々しく活動できる状況にはなく、旧労農党右派、中道からは激しく攻撃されていた。⁴¹

これからの闘争生活のため、大塚は信頼できる青年を助手として一人育てたいと考えていた。その青年には河上の身辺警護をさせるとともに、雑誌「社会問題研究」の編纂等を任せるつもりでいた。

大塚が七条の早川宅を訪れた時、立野は同僚の青年とともにガリ版を刷っていた。立野は作業をしながら、大塚と早川の議論に耳を傾けていた。その様子に大塚も気づく。大塚の眼には、立野は、ひとときわ誠実な青年に映った。大塚は早川を鴨川の土手に連れ出し、その青年の素性について詳しく訪ねた。

大塚は、自伝「未完の旅路」の中で、この時のやりとりを次のように記している。

私が眼をつけた方の青年は、京都に歴れっきとした両親があり、最近まで美術学校に通学していたが、成長するにつれて虚偽に満ちた社会に憤りを感じるようになり、思いつめた末に絵筆を折って早川君を訪れたものであった。私は率直に、「あの青年が希望するなら、私が預かり度いから、よく話し合ってみて欲しい」と申し入れた。早川君は極めて無造作に私の申し出を承知してくれて、「明日午前中に本人自ら河上先生のところへ返事に

行くように話しておきます。彼が優しくして真面目であることに間違いないが、思いつめると絵筆を折って家を飛び出すような一徹者だから、その点を飲み込んで鍛えて下さい。」⁴²

翌日、立野正一は、煎餅布団を毛布で包んだものと、若干の書籍を抱えて、大塚を訪れた。立野は吉田山麓・神楽岡の大塚宅に寄宿しながら、河上肇の警護を始める。その頃の大塚宅には、水平社幹部・朝田善之助（一九〇二〜一九八三）などの活動家が集まっていた。

朝田は京都府愛宕郡（現京都市左京区）出身の靴職人であり、全国水平社および下部組織の京都府水平社の創立に関わった。一九二二年四月二日の京都府水平社創立大会では、全水の宣言・綱領を朗読している。翌一九二三年の第二回全国水平社大会では参加者と警衛隊が衝突した。事態収拾のため朝田ら水平社員四名が形式上の乱闘首謀者として自首し、懲役八ヶ月に処せられる。この捨身の貢献は、朝田の声望を大いに高めた。⁴³一九二八年三月、普通選挙で台頭した左翼に対して弾圧が行われ（三・一五事件）、水平社も打撃を受ける。

山宣の労農葬当日、朝田は街頭でビラを撒いて下鴨署に検束される。この時の警察の取調べの様子が、京都地方労働運動史に記されている。⁴⁴

——内務省はすでに共産党の一斉弾圧を計画しはじめていた

ことから、やがて朝田に対しても共産党の関係を追及することとなった。すぐ足のついた火鉢の台座に正座させ、膝の間に竹刀入れた上、竹刀でこつき廻すという拷問をはじめた。(中略) 夕刻身柄をさらに松原署に移し、拷問を続行した。最初は前と同じ姿勢をとらせ、馬穴に水を入れて両手で支えさせたが、朝田は取調べに応じないのみか、馬穴を放り出してしまった。激昂した特高は、上半身を裸体にし一人が後ろより頭髪をつかみ、二人が両方から朝田の手をとり、他の一人が、火鉢の台座をけとばして、尻持をつかせ、こんどは台座を足の上において、上からおさえ、竹刀で散々撲ったあげく、一人が薬罐で鼻に水を注いだ。このため朝田はまもなく失神した。するとこんどは背後より腰や背中を靴で足げりにするという乱暴を行い、深更に及んだ。

もつとも朝田も一方的に暴行を受けていただけではない。この拷問の数日後、朝田は監視の隙を盗んで脱走する。松原署の今井部長刑事はこの失態により免職となる。朝田は約八ヶ月間名古屋の知人宅に潜伏し続け、同年十一月に再び逮捕される。京都の警察署は逃走事件の責任が蒸し返されるのを嫌い、各署で朝田を押し付け合った挙句、十二月には放免してしまう。

八ヶ月間の失踪中、朝田の妻と二人の子供は、親戚に借金をしながら糊口をしのいだ。帰宅後の朝田は、しばらくは本業の靴作りで借金を返済していた。しかし闘争戦術に長けた朝田を周囲が放つて

おくはずもなく、大塚は労農党同僚の田中房次郎を介して労働運動に引き込んだ。⁴⁵

間もなく大塚らは、美工にほど近い東山区・今熊野に移住する。今熊野の大塚宅には、朝田のほか、田中房次郎、洛西染物労働組合の臼田銀一、陶磁器工組合の金井健吉、京都合同労働組合の坂本秀雄、中野健次、西陣織物労働組合の赤石円三郎など、警察の拷問の洗礼を経た屈強の活動家が寄宿していた。⁴⁶ 彼らが「東山時代」と呼んだこの時期に、立野は河上警護の傍ら、寸暇を惜しんで社会思想や労働運度の書籍を読みあさった。

一九三〇年一月には、労農党中央部における作業のため、河上肇は東京・西大久保に移住する。河上の身辺警護と作業補助を兼ねて、立野と大塚も一時河上宅に寄宿する。⁴⁷ 東京移住直後、河上は共産党の決議に基づき、衆議院議員として、京都選挙区から立候補することになる(一月二一日解散、二月二〇日投票)。川上、大塚、立野らは東京と京都を忙しく往復した。京都で開催された河上の政見演説の様子を、立野は次のように語っている。

一番、今でも非常に印象に残っているのは、七条の未解放部落の小学校の会場でしたね。もうそれは超満員でした。とにかくその当時は、少しでも、少しでも、何かこの、共産主義とか、それから革命とかいうふうなことを、具体的に連想するようなことを言うと、すぐもう「弁士注意！」

普通の演説会よりは、やや向こうも遠慮してまずけど、それ

でも「注意！」の次に「中止！」が来ますからね。先生はもう、非常に言葉を選んで言うておられました…。その時にね、必ず山宣のことが引き合いに出されますね。自分は、山宣のように——これはねえ、言葉がねえ…下手にその通りのことを言うと、何か誤解を生みますが、『山宣のように強く闘う力はないかもしれないが、しかし、山宣のように死ぬ覚悟はしておる』と。そういう、その態度が非常に真摯なねえ…、痩せこけてはおるが、そういう時には非常に鋭い目をして、先生は会場を見渡しておられるんです。そういう瞬間は、前の方に座ってる老人達がですね、目をきらきら…：こう何か、涙で一杯のような顔をしながら、非常に感動してねえ。そして、そういう言葉とともに、あの演説が終ると、それこそ万雷の拍手を、ええ、熱狂的な拍手をするんですね…。⁴⁸

同年四月から起きた洛北友仙工争議のため、大塚と立野は京都に留まって活動を始める。

一九三〇年四月から五月にかけて起きた洛北友仙工争議は、高野く修学院界限（現・京都市左京区南部）の友仙工場の職工が、解雇、賃下げ、手待ち（無給待機）の撤廃を求めた労働争議である。この争議の背景について、京都地方労働運動史は次のように述べている。

（洛北友仙の）職人は地元の人は少く、各地から縁故たどって集ってきている人が多く、（中略）京都の友仙では一番気の荒

い、ある意味ではがらの悪い職人が集まっていた。しかも各工場に一人ずつ職長がおり、これには古参の職工中、とくに腕前の強いものがなり、（中略）これら職長で進励会という団体（ゴロツキ団体と紙一重）をつくって、大きな力をもっていた。⁴⁹

遠隔地出身の職人達、旧態依然とした上下組織、暴力団まがいの職長団体、つまるところ労働運動の組織化にはもつとも不利な条件が並んでいた。このような状態の中で、

昭和五年四月そのすぐ近くの鐘紡京都工場に大争議が勃発し、付近は物情騒然としてきたところへ、折からの恐慌で友仙業界も深刻な不況に見舞われ、工場主側は賃金引下げでこれを切抜けようと奇々協議をはじめた。⁵⁰

四月はじめから中旬にかけて、大塚・立野らは一つ一つ工場を回り、職人達の前にアジェンションを行った。やがて主要工場の組織化の目処がたち、四月一七日田中部落水平社夜学校で工場代表者会議を開く。二〇日洛北染物労働組合を設立し、団体交渉を開始する。具体的には、解雇、賃金引下、手待ちへの絶対反対、賃金三割値上げ、解雇手当・手待ち日当の制定、職工長の廃止、健康保険金の全学資本家負担、飯代三割値下げ、手待ち中の飯代資本家全額負担、社宅料の三割値下げ等を要求した。

工場主側は要求を拒否し、労組側は二五日からストライキに入っ

た。工場は労組に関係する争議団員を次々に解雇し、暴力団を使つて争議団を襲うなどした。一方、労組側は友仙工場のみならず、労働党支持団体と協調してゼネストに突入した。さらにデモ隊を組織して工場住宅に押しかけるなどして対抗した。この間、洛北染物労働組合に加入した者は二〇〇名を越えていた。

下賀茂警察署の根垣署長は管轄域の不穏な情勢を憂慮し、労使の調停を斡旋することにした。調停は難航したが、五月二二日から二三日にかけての三度目の調停において工場主側が争議団の要求をほぼ全面的に受け入れる形で妥結した。

二三日夕刻、争議団は田中古川町の本部前で解団式を行う。大塚有章は「この戦は是で終わったのではない、寧ろ今後にあるのだ」と団員に呼びかけ、万歳三唱のうちに解団した。

大塚、立野らは、朝田善之助の指導のもと、組合関係者、水平社員などと協力し、約一ヶ月の闘争の末に争議を勝利に導き、労働党の組織拡大に成功した。^{51 52}

同年夏、大塚、立野らは洛北友仙争議の成功を背景に、京都労働組合総評議会を結成する。これまで有力な労働組合を持たなかった新労働党にとって、京都総評は最も重要な支持母体となった。八月一日、京都総評関係者は三条青年会館に大山郁夫を迎えて結成大会を開く。参加組合は、京都合同労働組合、京都皮革工組合、洛北染物労働組、西陣賃業者組合革新同盟、京都陶磁器工組合、京都運輸自由労働組合準備会、京都市電交友会準備会、滋賀繊維化学労働組、洛

北友仙工協議会であった。綱領には解雇・賃下げ反対のほか、婦人・青年・朝鮮人・中国人労働者の労働条件改善、治安維持法撤廃、帝国主義戦争反対などを掲げた。

京都総評の最大の特徴は、労働党系でありながら参加組合員に政党支持の自由を認めた点である。これは労働者の要求に合致する限り、共産党・労働党のみならず、社会民主主義者指導下の労働者も獲得しようとする戦略に基づいていた。

一方、この結成大会では労働党の京都市議・奥村甚之助が除名される。奥村は一九一九年から二三年にかけての奥村電気商会争議を率い、京都地方評議会指導者として最左翼に立ち続け、現在は労働党京都府連合会の看板となっていた。しかし一九二九年京都市議当選後は次第に争議現場から遠ざかり、洛北友仙争議を境に、その声望は大塚有章に取って代わられた。

一九三〇年六月には、奥村が指揮した京都市バス争議が惨敗する。この京都市バス争議は、それまで労働運動にほとんど縁のなかった女性車掌を争議団として組織するという画期的な側面も持っていた。しかし奥村は、市庁舎での終盤交渉で明確な回答を引き出せず、結果として労働条件改善は実現しないまま、争議団主要メンバーが解雇された。⁵³

争議に参画しはじめたばかりの立野は、奥村を、過去の実績にあぐらをかく幹部——彼らの言葉で言う「ダラ幹」——とみなした。立野は、田中房之助、坂本秀雄とともに奥村を非難した。大会終盤で奥村の除名動議が提出され、奥村の抗弁もむなしく、圧倒的多数

で可決される。議決後、奥村は議長の大塚に殴りかかろうとしたが、大会を監視していた佐伯特高課長に制止される。

その二ヶ月後の十月二十日、奥村は国鉄山陰線嵯峨野駅で列車に接触して重傷を負い、四日後に死亡した。⁵⁴

友仙争議や総評結成と前後して、立野が最初に訪ねた七条の活動家・早川忠孝も別の争議に参画していた。三十年四月、下京区の晒工場において、朝鮮人労働者が差別撤廃と待遇改善を掲げた闘争を始める。この工場の七十人前後の従業員は、大半が朝鮮人であり、その中に崔用一という進歩的な労働者がいた。崔は早川と相談しながら朝鮮人従業員の団結と組織化をはかり、蔑視と虐待を繰り返す工場側と闘った。ここでも争議団によるストライキと実力デモ、工場側による解雇と切り崩し工作との競り合いが同年十月まで続いた。この争議は結果として失敗に終わり、崔はじめ工場の争議団全員が解雇されてしまう。

同じ下京区にある約四十人の朝鮮人従業員が働く製紙工場でも三十年春頃から争議が起きている。早川もこの争議の指導にあたり、洛北友仙争議団ほか各労働団体との共闘を計った。五月二六日には三条青年会館で演説会を開催している。争議は六月まで続いたが、結局この争議も従業員の解雇で終わってしまう。⁵⁵

総評解体

この頃、洛北友仙の勝利や総評結成の実現にもかかわらず、結党僅か一年の新労農党を解消しようとする動きが現れる。新労農党は共産党再建と、その指導下にある日本労働組合全国協議会（全協）再建の補助的手段として結成された。しかしこの動きを全ての活動家が支持した訳ではなかった。事実、新労農党は、肝心の共産党本部との連絡も取れなかった。こうした状態がかえって共産党再建を阻害すると考えた河上肇らは、新労農党解消を主張する。一方、新労農党の労働運動への貢献を重視する大山郁夫らは、解消に反対して対立する。

一九三〇年十月二一日、河上らは「労農党解消のために残された唯一の道としての戦闘的解体」という意見書を発表する。京都の小工場を飛び回って争議現場を指導していた立野にとって、河上の解消論発表は晴天の霹靂であった。

立野も、新労農党は共産党再建と並行して究極的に解消すべきであることは理解していた。しかし、洛北の友仙工場のような後進地域で必死に組合を組織し、ようやく総評を設立した矢先である。河上の解消論はあまりにも現場の実状を無視した主張に思われた。

立野らの不満を押さえつけるように、解消派の論客は主張する。

——（一九三〇年に）全国同盟が取り扱った辻紡績を見よう。

再三の攻撃によって辻某という中流の資本家は没落してしまつた。彼らはそれで解放されたか否か！辻紡績は日本綿花が経営することになつた。一生懸命になつて辻某という資本家をやつつけた辻紡職工諸君は、新に喜多又蔵という強敵を迎えねばならなかつた。全国同盟の指導では日本綿花には勝てなかつた。大量解雇で逆襲されたのである。仮りに、日本綿花にも勝つたとする。今度は日本綿花を牛耳っている大資本金融家が新たな敵として前面に乗り出すだろう。

そして大資本に勝つためには、全国、否、全世界の労働者を指導する唯一の組織・共産党のもとに結集しなければならない。

三〇年十二月に辻紡績を解雇された朝鮮人約三〇家族を含む元従業員に同情が集まつていた時期だけに、立野らも容易に反論できなかった。⁵⁶とはいえ党解消は、洛北友仙をはじめとする総評参加の組織に打撃を与える。立野や大塚らは、河上に当面の解消延期を強く訴えた。⁵⁷

この間にも、京都陶磁器工組合は、三割〜七割にも及ぶ賃下げに抗議して大争議を起こしていた。工場側も極度の経営難で容易に譲らず、争議は苦戦・長期化した。組合は労働党と総評に必死で共闘を訴えた。また、浄土寺馬場町の乳菓製造販売所では、パートタイムの苦学生たちが雇用維持のため、やはり労働党に支援を要請していた。⁵⁸

三〇年の秋から冬にかけて、不況はさらに深刻化した。七年前に

奥村甚之助が争議を率いた奥村電機商会は既に倒産し、約六百名の従業員家族が旧社宅から転出することさえできず、絶望的な貧窮に喘いでいた。⁵⁹

洛北友仙工場の経営も苦しく、十一月には再び賃下げの動きが出たため、組合はゼネストで対抗した。前回争議と同様、工場側は暴力団を雇って組合活動を妨害した。争議団は左京区田中に表向きの本部を一カ所、秘密司令部を一カ所設置し、暴力団の襲撃と警察の弾圧に備えた。

十一月十二日、労働党の田中房次郎がスト中の工場を廻り、賃下げ撤回・手待ち手当支給等の要求書を提出した。田中が要求書を提出する間、暴力団が罵声を浴びせ続けていたが、田中は無視し、争議団を率いて次の工場へと急いだ。

暴力団の悪罵に反撃しようとしないうちに、争議団員が苦情を述べた。労働党解消問題で不機嫌になつていた立野も、田中の弱腰を難詰した。立野は、赤石円三郎、中野健次らとともに、このままで争議団の士気にかかわる、工場主宅に襲撃を加えよと主張した。

この襲撃計画に対して大塚有章は難色を示す。襲撃は工場側の報復と警察の弾圧を招き寄せ、争議団組織は確実に打撃を被る。長期戦に備えて実力行使は慎むべきと懐柔を試みた。だが立野らや争議団の主張は強硬であつた。このひと月前、陶磁器工組合の加藤護一、金井健吉らが経営者宅を襲撃して争議の進展に一役買つており、対抗意識もあつたのだろう。

大塚は秘密司令部に潜む朝田善之助・羽根田兼道に連絡を取る。

ベテランの朝田も襲撃には反対しなかった。

翌日夜、大塚、立野らは百名近い争議団を率いて吉田下阿達町の小島工場へおしかける。争議団は加茂川で石を拾って工場主宅に乱入し、器物を破壊した上、工場主の妻を負傷させた。

この騒ぎを聞いた川端署の警察官は工場に駆けつけ、立野を含む百名近い争議団全員を検束する。

その後ただちに朝田善之助、洛西染物労組の臼田、京都合同労組の坂本らが組合員を率いて応援に駆けつけ、争議体制の立て直しをはかった。警察も争議の調停に乗り出す。十二月に入り、工場側は賃下げを撤回し、争議は一応の勝利を収めた。⁶⁰

だが立野らのテロ戦術は、洛北染物労組の組織を破壊してしまい、総評の勢力を大きく後退させることになった。

この頃から、京都総評の活動家に対する警察の対応も厳しくなっていた。不衛生な留置所の出入りにより、立野らの体は虱だらけになった。朝田や大塚への取調べは一層苛烈で、激しい拷問をともった。

洛北友仙争議で検束された朝田はいったん釈放されるものの、翌十二月に大阪・天王寺公会堂で開催された全国水平社大会で再び検束される。検束時に朝田は警官に激しく殴打され、一週間にわたり戒署の地下監房に布団もあてがわれないまま留置される。出所時、朝田の顔面は蒼白で、呼吸困難となっていた。同年暮れに朝田は大量に咯血し、しばらくは起き上がることができなかった。

翌一月から大塚・立野らは赤色救援会京都地方委員会という組織をつくり、朝田のような病身の活動家、拘置中の活動家への慰安・差し入れ、そのためのカンパを細々と実施する。この救援活動は臼田銀一、赤石円三郎を中心に引き継がれ、一九三三年二月頃まで断続的に続けられたようであるが、以降の記録は途絶えている。⁶¹

一九三一年に入り、労農党解消反対派が全国的な労働組合評議会を結成する動きを強める。党解消派の京都総評は、これに対抗するため、三一年三月二八日、自ら解体を決議する。河上、大塚、立野ら解消派が労農党から完全に離れる一方、大山郁夫ら解消反対派は引き続き党を維持し続けた。

本来ならば、解体された総評傘下の組合は、直ちに全協へ合流することが期待されていた。しかし総評は既に弾圧で大きな痛手を負っていたし、全協に至っては本部が存続しているのかさえ不明であった。結果として総評解体は不毛な停滞をもたらすだけに終わり、立野らの一年以上におよぶ労働運動の成果は水泡に帰した。⁶²

一九三〇年のいつ頃か、労働運動における立野の最初の師・早川忠孝が、警察や企業家から金銭を授受していることが明らかになった。⁶³ 前年四・一六事件後の早川は、地下に潜る他の活動家を差し置いて、過激な発言とスタンドプレーに明け暮れていた。早川が関わった下京区さかしの晒工場や製紙工場の争議は、無残な敗北に終わった。これらの争議で、警察や経営者との取引があったと見られている。

立野のような純真な青年が、早川の派手な振舞いに惹き付けられたのは致し方のないことであった。

とは言え、早川をはじめ、陶磁器工組合のメンバーは、十分な教育機会を与えられなかったにも拘らず、書物を捨てることなく、理不尽な抑圧に耐えながら、組合の思想と実践を支えていた。早川と同僚である谷口善太郎の経歴は、組合員達の境遇を象徴している。

谷口は一一歳のとき石川の田舎で徒弟として陶工生活の一步をふみ出したが、一九二一年二月同県人をたよって上洛した。

彼ははじめ弁護士を夢み立命館に入ることを目標にせつせと金をためたが、ようやく四〇〇円余になった大正一一年一月に、銀行の破産で預金していた全財産を失ってしまった。⁶⁴

谷口と同様、早川忠孝、金井健吉、加藤護一など他の陶磁器工組合員の青春も、おおむね悲惨なものであったとされる。彼らの境遇は、さほど経済的な不自由のなかった立野に少なからず負い目を感じさせたであろう。

一九三一年四月、早川は下京区の晒工場の朝鮮人労働者が起こした争議に介入する。前衛的な朝鮮人労働者の努力を踏みにじるように、早川は各方面の応援を退け、工場側から若干の手当支給を引き出しただけで、争議を打ち切ってしまう。⁶⁵

間もなく早川は右翼活動家に転じた。一九三二年一月、早川は

一君万民精神を掲げる国家社会党近畿地方連合会結成大会に出席し、役員に選出される。⁶⁶ 国家社会党の活動の一環として、早川は南山城の農民運動に参加した。また一九三三年四月一五日には、皇道会京都支部結成発起人会に加わっている。⁶⁷

以後の早川の消息は不明である。

京都消費組合

総評解体による構成員離散を食い止めるため、一九三一年二月頃から、戦闘色を大幅に薄めた消費者組合の結成が企画される。四月二八日、京都・岡崎公会堂で河上肇らを講師とした「生活防衛演説会」は一五〇〇名あまりの聴衆を集める盛況ぶりであった。七月四日、京都無産者消費組合が正式に発足し、即売会、自動車に巡回販売、全日本無産者芸術連盟（ナツプ）の協力による移動映画上映会を開催した。

当時は世界恐慌による物価高騰・雇用不安を背景に、全国各地で消費組合が設立されていた。京都無産者消費組合が設立された一九三一年には、在日朝鮮人が京都大衆消費組合と朝鮮人消費組合の二組合を結成している。この二組合も、労働争議を通じて形成された朝鮮人ネットワークの解体を防ぐ狙いがあつたとみられる。

これ以外に京都には、京大学生消費組合、同志社学生消費組合、

京都家庭消費組合が存在した。

このうち京都家庭消費組合は一九二九年八月、同志社大学の元教授である能勢克男（一八九四〜一九七九）らを中心に結成された。

能勢克男は、一九二四年、当時の海老名弾正総長（一八五六〜一九三七）の推薦で法学部教授に就任した。⁶⁸海老名は一九二八年一月の校舎失火で、理事会から辞職を要求される。海老名辞職をきっかけとして、門下の中島重（一八八八〜一九四六）、石田秀一郎、能勢克男らと、理事会との間に確執が生じる。一九二九年四月、理事会は校舎移転計画を決定する。この計画は、校舎移転とともに、地価騰貴を見込んだ収益事業がセットになっていた。能勢、中島、石田ら法学部有志一三名はこの計画を土地ブローカー行為として批判し、学生達も授業ボイコットで同調した。この抗議に対し、理事会は能勢、中島らの解雇で応じた。同年六月、石田も依頼退職する。

中島、石田は同志社消費組合の理事であり、経営難の組合再建にあたっていた矢先の解雇・退職であった。同志社を追われた能勢、中島らは、組合活動の拡大と、自身の生計維持のため、新たに京都家庭消費組合を結成する。苦心の戸別勧誘の末に獲得した組合員の中には、河上肇のほか、京大法学部教授の佐々木惣一（一八七八〜一九六五）、末川博（一八九二〜一九七七）、文学部教授の田辺元（一八八五〜一九六二）、西田幾多郎（二八七〇〜一九四五）、同部出身の戸坂潤（一九〇〇〜一九四五）、中井正一（一九〇〇〜一九五二）らがいた。経営者、医師のほか、芸術家が多いのも特徴で、池田遥郎

（一八九五〜一九八八）、伊谷賢蔵（一九〇二〜一九七〇）、黒田重

太郎、須田国太郎（一八九一〜一九六一）、土田麦僊、津田青楓（一八八〇〜一九七八）、福田平八郎（一八九二〜一九七四）、三谷十糸子（一九〇五〜一九九二）、河合寛次郎（一八九〇〜一九六六）、柳宗悦（一八八九〜一九六一）、青田五良（一八九八？〜一九三五）、青田七良、黒田辰秋（一九〇四〜一九八二）などが加入していた。

黒田辰秋は、組合結成前まで、柳や能勢の支援を受けて上加茂民芸協団として活動している。^{69, 70}

藤井の研究⁷¹によると、上加茂民芸協団の活動では、能勢と黒田の考え方に齟齬が生じていたという。能勢は、大量工業生産、現代コンクリート建築、マスメディアなどの役割を肯定していた。これに対し黒田は近代工業生産に批判的であり、手工芸品を通じて、作り手と使い手の生きた関係を回復させることを目指していた。ただし能勢も、生産者と消費者の関係を再生させる必要性には異論なかったと見られる。家庭消費組合結成により、能勢と黒田の活動は再び歩み寄ることになった。

一九三〇年十月に組合が開催した子供服展覧会では、黒田辰秋のほか、上加茂民芸協団の元メンバー青田五良・七良兄弟が工芸品を出品した。黒田はペーパーナイフ、青田五良はショール、ネクタイ、青田七良はブローチ、カフスボタンなどを展示即売した。また機関紙「京都家庭消費組合月報」の題字は、津田青楓が担当した。

教育者と芸術家が理念的に歩み寄り、約六五〇人の組合員を擁し

て発足した家庭消費組合であったが、経営面においては早くも分裂の動きが現れる。一九三〇年一月、商品配給を担当する常務者たちが、歩合制から月給制（四十円）への改善、労働組合の承認などを訴えてストライキに突入した。常務者達は不安定な労働条件に加え、比較的高給の組合員が参加する「マダムの模擬店」⁷²のようなバザーに反感を抱いていた。ストライキによる混乱は長期化した。一月には旧理事の一部が脱退して洛友消費組合を設立、七月には常務者達が脱退して京都プロレタリア消費組合を設立し、相互が対立する状態を生む。京都家庭消費組合は、組合長に能勢、理事に中井正一を選出して運営が続けられたが、分裂や放漫経営によって赤字に陥った。⁷³

一方、京大にも一九三〇年五月に京大学生消費組合が設立され、独自の店舗を構えていた。他の消組にも増して極左的な京大消組に対し、学生課は三一年十月三日に解散勧告を通知する。回答期限を過ぎた七日、京都・川端署と府特高課は、京大消役員八名を検束する。

これに反発した京都無産者消費組合、京都プロレタリア消費組合、朝鮮人により結成された共信消費組合の三組合は、十月一日、学消暴圧対策協議会を開催する。そして京都染物労働組合、水平社京都支部、皮革工組合、労農党解消派などとともに共同闘争委員会を結成した。これらはいずれも大塚、立野らを中心とする旧総評傘下の組織であり、総評解体後のメンバー再結集をはかる動きでもあつ

た。十月二二日には三条青年会館で京大消暴圧批判演説会を開催するが、京大学生課も組合加入禁止勧告を出して学生に脱退を促した。

一月一五日には学生デモ隊が学生主事を襲い、負傷させた。大消は関係学生二十名の停学処分を下す。大量の停学処分、組合脱退者の続出、警察の介入などに屈する形で、京大消は闘争を打ち切る。以後、名称を吉田学生消費組合と改め、京大前に個人経営の形で存続した。⁷⁴

京都家庭消組、同志社消組の経営難、分裂発足した洛友消組、プロレタリア消組の零細経営、京大消組への弾圧を背景に、市内消費組合の大合同が望まれるようになる。

そこで一九三二年四月、比較的経営が安定していた京都無産者消費組合を核に、市内七組合が合同して、京都消費組合が結成された。吉田学生消費組合は、京都消費組合京大支部に改称する。組合長には前家庭消組の能勢克男が就任したが、常務者は無産者消組の出身者をはじめ、左翼関係者が多かった。これは合同前の出身母体という要因以外に、月給二十円程度を受容できる者を選んだ結果であった。

京都消組は、高野を本部として、田中、壬生、桂、同志社、京大に支部を設け、日用品販売、班活動、組合員の教育にあたった。一九三二年七月に関東消費組合聯盟が提唱した政府米払下運動（米よ

こせ運動）は全国に波及し、京都消組も払下げ団体指定獲得のための活動を展開した。当局との困難な交渉の末、三八年二月に京都消組は払下げ団体に指定され、組合員に廉価な米が配給されることになった。⁷⁵

しかし京都消組の活動は、政府米払下運動をピークに徐々に衰退に向かう。旧総評・全協の関係者や、朝鮮人が参加する京都消組は、日常的に警察の弾圧にさらされた。組合の販売会、共同購入、組合員獲得、会計その他あらゆる業務は薄給で働く常務者の肩にのしかかり、過労で倒れる者が続出した。また京都消組においても理事会と常務者との労使対立が発生した。売上高の減少、欠損拡大、組合大会の流会が、活動の停滞に拍車をかけた。⁷⁶

大塚と河上の逮捕

一九三一年の総評解消後、大塚は共産党本部から、上京して党中央で活動するよう、要請を受ける。大塚はこの要請を承諾するが、上京していきなり活動を始めても、すぐに逮捕されるだけである。そこで大塚は、左翼活動から脱落したように見せかけるため、労働団体等から徐々に距離を置き始めた。その一方、生計を得るため、西陣で「玉石同架」という古本屋を開業する。大塚は、能勢克男や末川博から寄贈された書籍を、この古本屋に並べた。

そのさい大塚は抜け目なく府の特高課を訪ね、妻子のある身でいつまでも運動をやっているのは、生活の道もたためぬので、こちらで生活を考え、落着こうと思つて本屋をはじめたと挨拶した。もちろんこの挨拶だけですぐ特高が大塚が運動から足を洗つたと安心するわけではないが、その後の彼の生活を注意した結果、彼がもう運動にタッチしている様子がないので、しだいに特高も安心しはじめたらしい。

同年暮、大塚は京都府警の佐伯特高課長を訪ね、

古本屋で生計をたてようとやってみましたが、一年やってみて、これではとても駄目なので、東京へ出ても一度サラリーマンに帰ろうと思うと挨拶した。大塚のこの一年間の実績が警察に疑惑をおこさせなかったのと、大塚自身の人柄のよさとが、特高課長を安心させたのであろう。特高課長は心底からこれを信用し、今後気をつけて一生懸命やつてほしいと大塚を激励した。それで京都府特高課では恐らく大塚を要視察人物のリストから抹消したのであろう。⁷⁷

大塚の偽装脱落は徹底していた。大塚に最も近い活動家の一部までもが、大塚の脱落を信じたようである。翌一九三七年一月、大塚は東京へ移動し、二年前から東京で暮らしていた河上肇の近くに居

住する。

昭和七年を迎えると、私は妻と下の子供二人を伴い、京都に数々の思い出を残して東京に去った。駅頭で見送ってくれたのは身内の人々と二、三の旧友だけで、京都府特高科の刑事の姿はもちろん、現役の社会運動家の姿は一人も見えなかった。短い期間ではあったが、京都の労働組合運動界を賑やかした男の出発としては誠にわびしい限りであった。⁷⁸

京都駅で大塚一家を見送った「二、三の旧友」の中に、立野正一が含まれていたか否かは分からない。しかし大塚夫妻が、その時もお、立野らを深く信頼していたことは、以下の東海道線車中の会話が示している。

「京都の四年間、慌しかったな。ことに最近の二年間、よくも病気をしなかつたものだと思うよ。疲れたと思わないかい」
「病気をしたり疲れてみたりする暇がなかったという感じがす。しかし、楽しかったわ。解消運動が起こって警察の弾圧がひどくなつてから、逃げ出す人は去つてしまつて、後に残つた人たち、あんな私心のない良い人たちの仲間に入つていれば、少々の苦勞なんてなんでもないものね。東山時代には天井から風が落ちてくるし、子供らのために用意していた食物は朝起きで見ると全部荒らされているし、考えようでは随分乱暴なこと

をされる訳だけど、あの人たちの真剣な努力を知っているんで絶対に不服には思いませんでした。」⁷⁹

一方、河上肇が立野をどのように見ていたか、河上の自叙伝の記述の中には見出せない。河上が立野のことを忘れたとは考えられない。河上は身辺警護に当たつた青年全員を記憶しており、それを自叙伝に記している。例えば、京都府水平社の小林、全協化学工業組合の団迫だんきこと飯野、金属労働者出身で「京都の労働組合から来た」野口など、彼らの経歴と行状は簡潔ながらも記録されている。⁸⁰

恐らく、三〇年〜三一年にかけての労農党解消をめぐる、河上と立野の間に激しいやりとりがあつたのだろう。河上は自叙伝で次のように語っている。

京都から私と一緒に東京に移つた義弟大塚は、マルクス主義の教養には不十分な点があつたけれども、いつも私の側にて最も誠実に私の身の上を考えていてくれたのだが、彼もまた、労農党本部がただ街頭の演説会をのみ能事としていた態度にあきたらなくなり、早く東京を見捨てて再び京都に帰り、そこで労働組合の組織に専心することにした。彼の驚くべき献身的努力によつて、京都地方の労働組合は見る見るうちに急速な拡大強化を遂げ、水の低きに就くが如く、海綿の水を吸うが如く、未組織労働者は次ぎ次ぎに組合へ吸収され、その組織率は京都

地方でかつて例を見ないほどの成功を収めつつあった。自然彼は、全く組合運動に没頭してしまい、他事はこれを顧る余裕のない有様であった。で、解消運動は間近の大阪で先ず火の手を挙げたのだけでも、彼は別にこれを問題にしようともしなかった。土地が離れている上に、事情がそんな風だったから、私は彼を解消運動の相手にする訳にも行かなかった。私はこの時くらい、自分ひとりが異分子の中にまじり、何も彼も自分の才覚一つで賄って行かねばならぬ羽目に逢ったことは、一生のうち稀である。⁸¹

このように大塚を称えながらも、解消問題当時の河上の孤独が吐露されている。河上は上京後も時々京都に戻っており、その折に大塚・立野らに会い、議論をしたと思われる。血の気の多い立野のことであるから、河上に殴りかかったのではないかとさえ思える。しかし大塚の回想によれば、そうしたことは起きなかったようである。

「連日連夜、不眠不休で活動しているのに、底抜けに朗らかでね。あれほど、理論闘争をやりながら、ヒスを起こした奴は一人もいなかったな。プロレタリアの楽天性という奴だよ。僕達と一寸ばかり品質が違うようだ」

(中略)

妻は繰り返して、楽しかった京都の思い出に触れていた。プロレタリアの高貴な品質を身につけた公正無私な青年たちとの交

りが、よほど妻の心を温めたらしい。⁸²

一九三二年三月、大塚は日本共産党に入党し、激務に没頭する。それは警察の監視をかくぐりながら、秒単位で党のスケジュールをこなす、その合間を縫って病弱な河上肇の面倒を見るといふ日々であった。八月、党中央委員の飯塚^{みつのぶ}益延(一九〇二〜一九六五)から、活動資金獲得のため銀行襲撃を計画するよう指示される。

飯塚は高等小学校を中退していたが、その後、独学でロシア語をマスターし、一九二六年から二九年まで、モスクワの東洋勤労者共産主義大学に留学した。ウラジオストクでの宣伝工作の後、三〇に帰国する。同年、特高に逮捕され、釈放後の三一年八月から共産党組織部・技術部・資金局を担当していた。⁸³

終始ロシア語でメモを取る頭脳明晰な飯塚の貫禄は、委員長を凌ぐほどであった。当時、大塚は疲労のため体調を崩しがちで、客観的情勢を見極める判断力が衰えていた。そして飯塚の指示を鵜呑みにし、大塚はかつての銀行勤務の経験を生かしながら現金強奪計画を立案する。⁸⁴

一九三二年十月六日午後三時過ぎ、大塚の計画に基づいて、西代義治(一九〇六?)⁸⁵と中村経一(一九〇八?)⁸⁶が少年1名をともなつて川崎第百銀行大森支店を襲い、役三一、七〇〇円の現金を強奪した。大森駅では大塚が、河上肇の次女・芳子(一九一二〜一九五二)⁸⁷が待機しており、西代らから現金を受け取った後、

各々行方をくらました。

大森ギヤング事件として知られるこの襲撃事件から三日後、党特別事業部の今泉善一（一九一〇〜？）が、警察に銃取引の現場を押さえられる。⁸そして取引に用いた紙幣の番号から銀行襲撃との関連が発覚し、以後、西代、中村はじめ党関係者が根こそぎ検挙されるが、大塚は逮捕を免れて潜伏を続けた。

一九三二年十二月、かつて「特殊部落民解放論」を発表して全国水平社創立の契機を作り、共産党委員長を務めた佐野学が、獄中から転向を声明し、翌三三年一月までの間に党員の大量転向を引き起こす。翌年の控訴審で、佐野は無為懲役から懲役一五年に減刑された。^{8, 9, 90}

一九三三年一月五日、襲撃事件後に検挙された党資金部・百瀬幸夫（？〜？）⁹¹の寝返により、大塚も逮捕される。一月一五日には河上肇が逮捕され、しばらく潜伏を続けていた河上芳子も九月十日には逮捕された。⁹²一時大塚英子（有章の妻）をかくまっていた画家・津田青楓は、同年七月から八月まで杉並署に留置される。九月以降、津田は所属していた二科展を退くとともに洋画の筆を折り、日本画に専念するようになった。⁹³

大塚は懲役一〇年で山口刑務所に下獄、河上は懲役五年で小菅刑務所に下獄した。河上芳子は留置所で転向を表明し釈放される。京都府警の佐伯特高課長は、大塚の東京移動の通報を怠ったとして更

迭された。⁹⁴

大森ギヤング事件を指示した飯塚益延みつのぶが特高のスパイであり、共産党の信用失墜を狙った工作であったことはよく知られている（松本清張、立花隆）。事件と並行して、警察は共産党に対するネガティブ・キャンペーンを展開した。党員が風俗営業で稼いでいる、美人局工作をしているなど、真偽不明の——恐らくほとんど偽の——情報をマスコミに向けて盛んに流した。⁹⁵

一九三三年一月二月には中央委員・小畑達夫おばた（一九〇七〜一九三三）⁹⁶が死亡し、リンチ死事件と喧伝される。その真相はともかく、一連の事件によって党員相互の猜疑心は極限に達した。日本における組織的な共産主義活動は終焉を迎えようとしていた。

第二章 参考文献

- 1 渡部編著「京都地方労働運動史」、三月書房、一九五九年、九五〜九六ページ
- 2 「近代日本社会運動史人物大事典」、日外アソシエーツ、紀伊國屋書店、第二巻、八二三〜八二四ページ
- 3 「京都地方労働運動史」（前掲）、二三六ページ
- 4 「近代日本社会運動史人物大事典」（前掲）、第一巻、七六三〜七

六四ページ
 5 「京都地方労働運動史」(前掲), 一二四〜一三四ページ
 6 同, 二〇三〜二〇八ページ
 7 「近代日本社会運動史人物大事典」(前掲), 第三卷, 三六四〜
 8 同, 第二卷, 九三ページ
 9 「京都地方労働運動史」(前掲), 二〇四〜二〇八ページ
 10 同, 二四七〜二六六ページ
 11 同, 二四二〜二四五ページ
 12 「京都大学百年史・総説編」京都大学百年史編集委員会, 一九九
 13 八年, 一一一〜一二二ページ
 14 油井一人編「20世紀物故日本画家事典」美術年鑑社, 一九九八
 15 年, 二八九〜二九〇ページ
 16 同, 五一ページ
 17 同, 二五五〜二五七ページ
 18 同, 一八八〜一八九ページ
 19 同, 三七七〜三七八ページ
 20 同, 九七〜九八ページ
 21 同, 二九六〜二九七ページ
 22 同, 二二二ページ
 23 同, 一九七〜一九八ページ
 24 同, 三一三〜三一四ページ
 25 同, 一一六〜一一七ページ
 26 同, 三四ページ
 27 三高記念室編「神陵文庫別冊 三高記念室展示図録 自由の鐘」
 二〇〇五年, 五九〜六一ページ
 「20世紀物故日本画家事典」(前掲), 一三四〜一三五ページ

同, 一四二ページ
 2 同, 二五四ページ
 3 京都市立芸術大学百年史編纂委員会「百年史 京都市立芸術大
 4 学」一九八六年, 四八〜四九ページ
 5 同, 三〇六ページ
 6 「20世紀物故日本画家事典」(前掲), 四一九〜四二二ページ
 7 原田平作ほか編「国画創作協会の全貌」光村推古書院, 一九九六
 8 年,
 9 戸村知子「日本人画家滞欧アルバム1922」
 10 <http://atlantic2.gssc.nihon-u.ac.jp/magazine/dbook/book6/index.htm>
 11 「近代日本社会運動史人物大事典」(前掲), 第一卷, 六七九〜
 12 同, 京都地方労働運動史」(前掲), 五五四〜五五八ページ
 13 同, 五六七〜六七四ページ
 14 同, 七六八〜七七二ページ
 15 大塚有章「未完の旅路」第二卷, 三一書房, 一九七六年, 一〇二
 16 〜一〇三ページ
 17 「近代日本社会運動史人物大事典」(前掲), 第一卷, 六三三〜六
 18 三四ページ
 19 「京都地方労働運動史」(前掲), 六二〇〜六三三ページ
 20 大塚「未完の旅路」第二卷(前掲), 一〇三〜一〇四ページ
 21 「近代日本社会運動史人物大事典」(前掲), 第一卷, 六七〜六八
 22 ページ, および京都地方労働運動史」(前掲), 一三七〜一三九
 23 ページ
 24 「京都地方労働運動史」(前掲), 五七三〜五七四ページ
 25 大塚「未完の旅路」第二卷(前掲), 一〇五〜一〇九ページ
 26 「京都地方労働運動史」(前掲), 七三一ページ, および大塚「未
 27 完の旅路」第二卷(前掲), 一〇二ページ

大塚「未完の旅路」(前掲), 第二卷, 一一二ページ
 NHK「教育テレビスペシャルテレビ評伝(二)河上肇」一九
 七九年八月二十八日放送
 「京都地方労働運動史」(前掲), 七三二ページ
 同, 七三二ページ
 同, 七三〇〜七三八ページ
 大塚「未完の旅路」第二卷(前掲), 一一八〜一二九ページ
 「京都地方労働運動史」(前掲), 七三八〜七四七ページ
 同, 七五六〜七六一ページ
 同, 七六八〜七七〇ページ
 同, 八〇〇〜八〇四ページ
 同, 八三九〜八四四ページ
 同, 八四五〜八五一ページ
 同, 三八七〜三八九ページ
 同, 八五一〜八五二ページ
 同, 一〇七三〜一〇七九ページ
 同, 八五五〜八五九ページ
 同, 六三二ページ
 同, 二〇八ページ
 同, 一一一五ページ
 同, 一一九九〜一二〇〇ページ
 同, 一四七七〜一四七八ページ
 「近代日本社会運動史人物大事典」(前掲), 第三卷, 八四二〜八
 四三ページ
 藤井祐介『『世界文化』と『転向』——中井正一と能勢克男』現
 代文明論, 第四号, 二〇〇三年, 四八〜四九ページ
 吉田正純「生活に対する勇氣(前編)」京都大学生涯教育学・図
 書館情報学研究, 第二号, 二〇〇三年, 一二三ページ

藤井『『世界文化』と『転向』——中井正一と能勢克男』(前掲),
 五二〜五六ページ
 吉田正純「生活に対する勇氣(前編)」(前掲), 一九ページ
 「京都地方労働運動史」(前掲), 一二八九〜一二九〇ページ
 同, 一二九一〜一二九四ページ
 同, 一二九四〜一二九六ページ
 同, 一二九六〜一二九七ページ
 同, 一〇七九〜一〇八〇ページ
 大塚「未完の旅路」(前掲), 第三卷, 九ページ
 大塚「未完の旅路」(前掲), 第三卷, 一二ページ
 河上肇「自叙伝」第二卷, 岩波文庫, 一九九六年, 一二八〜一三
 〇ページ, 一七三〜一七四ページ
 河上「自叙伝」(前掲), 第二卷, 五五〜五六ページ
 大塚「未完の旅路」(前掲), 第三卷, 一三〜一五ページ
 「近代日本社会運動史人物大事典」(前掲), 第一卷, 一六四〜一
 六五ページ
 「京都地方労働運動史」(前掲), 一〇八〇〜一〇八三ページ
 「近代日本社会運動史人物大事典」(前掲), 第三卷, 七八六〜七
 八七ページ
 同, 第三卷, 七〇三
 同, 第二卷, 一六六〜一六七ページ
 同, 第一卷, 三八三〜三八四ページ
 同, 第二卷, 八二三〜八二四ページ
 「京都地方労働運動史」(前掲), 二三六ページ
 「近代日本社会運動史人物大事典」(前掲), 第四卷, 五八三〜五
 八四ページ
 「京都地方労働運動史」(前掲), 一〇八三ページ
 「近代日本社会運動史人物大事典」(前掲), 第三卷, 四五六〜

- 94 「京都地方労働運動史」(前掲), 一〇八〇ページ
- 95 西村勝一「私歴をひらく」マルジュ社, 一九八三年, 七九〜八七ページ
- 96 「近代日本社会運動史人物大事典」(前掲), 第一卷, 八一三〜八一四